読むということ

―自分のために―

永野むつみ

このところ、「読みきかせ」の指導を頼まれることが増えている。始まりは、ある公立文化施設から頼まれ、いやいや請けた仕事「絵本塾」。「市民に、とりわけ子育て中の母親に、読みきかせの指導をして欲しい」というのが当初の依頼だった。人形劇俳優の私に、朗読を指導する力量があるとも思えないし、なによりも私は、「読みきかせ」と言う言葉が好きではない。そこで、「ただ絵本を読む」「しかも自分のために」「一番楽な声で」「子どもの参加は原則的に無し」ということならお請けできる、として出発したの

だった。

講座は終了し、今では自主的なサクールとして続いている。参加者は三十代から六十代の女性たち。月に一回、二時間。事前にテーマを決めたり決めなかったりして、それぞれ二冊ほどの本を持ちよる。その中からさらに二、三冊を選び、一ページずつ声を出してまわし読みをする。絵本の話をしているだけなのに塾の仲間たちとは、ずうっと昔からの知り合いのような気がしてくる。いわゆる履歴書に書くべきことはほとんど知らなくても「あ、この人に触れた」「この人知ってる」と感じる。私はこういう出会い方が好きだ。何を美しいと思い何を憎むか。それぞれが感動を語り、感動をともにするとは多分、人格の根っこのところに触れ合うことなのだろう。今では私の大切な時間となっている。あまりにも楽しいので人形劇の公演や、講演に行ったおりに、この話をあちらこちらでしてしまう。それで、興味をもたれた方のところにまた招かれる、ということになるらしい。

つい先日も仙台の近隣の市へでかけた。二十代から五十代の男女が二冊ずつ好きな絵本を手に、嬉々として集まられていた。絵本好き、あるいは「読みきかせ好き」はどこにも大勢いるらしい。どの本も魅力的だったが、誰もまだ読んだことがないということでこの日は、私が持参した『かちんこちんのムニ

ア』（アスン・バルソラ作・絵／宇野和美訳／徳間書店）を読むことになった。まず、私が、私の絵本塾で大切にしていることを話した。とりわけ、声を出して読むにあたって心がけてほしいことについて、つまり、「書いてあることをまず自分がちゃんと読み取ること」「無理に表現しないこと」を伝えてからまわし読みをした。ちなみに本文の出だしはこうだ。

「アンドレア、ムニア、おきなさい！　もう8時よ」
ねえさんのアンドレアは、ぱっとはねおきましたが、ムニアは、きこえないふりをして、ふとんをかおまでひっぱりあげました。
しばらくして、またおかあさんがやってきました。「ムニア、さあ、おきるじかんよ……」

三人目が読み終わったとき、私が質問した。
「あなたはふとんを顔まで引っぱりあげたことありますか？　そのときの、足先や腰や顔に布団が触れた感じを思い出してみて」
「えーと。そんなこと考えたこともないよ」とその読み手は頭を抱える。
「今あなたに必要なイメージは、絵画や写真のようなビュジアルなものではなくて五感というか体感の記憶なの。思い出してみて」
「うーん」と唸ったあともう一度読み直す。するとたいてい、緊張した硬い読み方だったのが急に柔らかく、そうしてゆっくりとした調子になる。声も内側にいったん呑み込む感じで、それから出てきているように聴こえる。
この変化に気がつくのはまず聴いている

人。その後に本人。最も決定的な変化は、聴き手の私たちにも、書いてある中身がわかるようになること。それまでは、言葉は確かに届いてはいるのだが、何を言っているのか良くつかまえられないことがある。スピードが速いとか遅いとかではない。取り残されたような感じがする。情景が浮かび上がってこないのだ。ところが読み手が書かれている内容を読み取ろうと集中すると確かにテンポが変わり、私たちもついていけるようになる。さらに追い討ちのように質問する。

「おかあさんはどこから声をかけたの？　ベッドの近くで？　遠くで？　子どもたちを見下ろしながら？　あるいは顔を寄せて？」

すると、初めのおかあさんのせりふと、二言目とに変化が生まれる。おかあさんの視線の高さと方向を意識してもらっただけなのに、声の強さや方向の変化となり、声に色が生まれる。結果としてそのシーンがありありと見えてくる。聴き手にも読み手にも。そしてそれは違う人にやってもらうとまた違った読み方になる。そこには確かに読み手のとらえ方、イメージの違いが反映する。もし私ならどうするだろうかと、その登場人物にわが身を置いて考える。人は自分の体験から推しはかることでしか他者や、事柄を理解することはできないのだろうか。同じだと安心したり、違う場合はへえと驚いたりする。

どちらが正しいとか間違っているとかいうものではない。理解はできるが共感できない、とか頭ではわかるが腑におちない、ということもありうる。本の中に書かれている人物や事柄に心を寄せたり、跳ね飛ばされたりする。

「ああ、こういうことだったのだ」と、かねてから自分の中にもやもやと存在していたものに言葉が与えられ、その正体に気がついたりもする。自分の心の内側を語るときに「あの本にもあったけれど」とか「あの絵のように」と、自分の言葉の足りなさを補う。

同じ本を読んだ人とだとなおいっそう理解し合える。つまり共通の言語をもつということになる。言葉への信頼をとりもどすことができる。しかしやはり読むということは極めて個人的で個性的なことなのだなあと思わざるをえない。声を出して読むとそれがいっそう表面化する。読みきかせとはそういうことをしているのだ。聴き手の側からいうと本そのものへの興味と、読み手への興味が同時に満たされていく。そこが面白い。

こうしたやり取りを繰り返しているうちに、参加者は始まる前のいくつかの質問に、自分で答えを出しているようだ。

「おばあさんの声はおばあさんらしく、子どもの声は子どもらしく、魔女の声はやはり怖

い声で言った方が良いのでしょうか」
「感情をこめて読んでも良いのでしょうか」
「どの子にもわかるようにゆっくり読んだ方が良いのでしょうか」などなど。

色々な考え方があると思うが私は、読み手はただの通りのいいパイプであればよいのではないかと思っている。読み手が、書いてあることだけ読もうと思っても、どんなに抑えても滲み出してくるその人らしさ。それが個性であり表現というものではないのか。まず自分が受けとめ、味わうということがあり、その結果として表現が生まれるのではないかと。読み手がどんなに下手でもそれなりに喜んでもらえるのは、確かに何かが伝わっているということ。それはやはり本そのものに力があるということと、聴き手の子どもたちに聴き取る力があると言うことなのだろう。だから私たちは安心して好きなように読めばいい。まずは自分のために。

絵本とは良いものだ。子どもだけのものにしておくのは惜しい。絵も文章も魅力的だし、きちんと人間が描かれ、哲学がある。なによりも文字が大きいし、短いのも有りがたい。年を重ねてますますそう思う。

（人形劇団　ひぽぽたあむ）

カット　山根裕子